

賀市勢要覽
附觀光案內

特254

348



始



特 254
348

市勢要覽

昭和十一年版



(一)
筒飯の都の昔より
日本海の潮風に
港ぞ敦賀わが郷土

(二)
鐵産立國の
伸びゆく力海陸に
譽れを擡ふわが郷土

(三)
新歴史の金ヶ崎
天地はひらけ隆々と
希望の都わが郷土

敦賀市歌

代々の榮を重ねきて
燦然光る躍進の
謳はんいざや大敦賀

進取の民の赤心に
歐亞を結ぶ要港の
誇らんいざや大敦賀

氣比神宮の神風に
文運興り榮えゆく
仰がんいざや大敦賀



敦賀市役所



はしがき

帝國の北門たる敦賀港は往古より日本海方面唯一の良港として世に喧傳せられて來た。今や歐亞連絡の國際通路とし、又日滿連絡の最捷徑路として最も重きを爲して居る。港灣の設備も略完成を告げたが、尙將來の大成を期して居る。尙ほ此地は風光明媚、名勝舊蹟に富み、歴史的感興を惹くものも尠くない。去る四月一日隣接松原村と合併して市制を施行せられたに就いて、こゝに新敦賀市の全般に亘つて其の梗概を記述した。幸に參考の資料ともなれば仕合せである。

敦賀市勢要覽目次

第一	沿革	一
第二	地勢	三
第三	土地	四
第四	戶口	四
	1、人口及世帯數	四
	2、出生及死亡	五
	3、職業別戶口	五
第五	教育	六
	1、公立學校	六
	2、公私立學校	六
	3、學齡兒童就學狀況	八
	4、小學校兒童進學狀況	八
	5、圖書館	九

第六 兵 事

1、陸海軍現員表.....一九

第七 社 寺

1、神 社.....一〇

2、寺 院.....一〇

第八 產 業

1、各種生產高.....一一

2、主要生產物.....一一

3、敦賀港主要貿易品.....一二

第九 港 灣

1、位置及地勢.....一二

2、水 深.....一三

3、潮位及潮流.....一三

4、海底地質.....一三

5、築港工事.....一三

第十 交 通

6、陸上設備.....一五

7、繫船及荷役.....一六

1、道 路.....一八

2、踏車及船舶.....一八

3、航 路 調.....一八

第十一 運 輸

1、旅 客 調.....二〇

2、貨 物 調.....二一

3、移輸出入貨物數表.....二一

第十二 通 信

1、電信、電話發受數.....二二

2、郵便、小包發着數.....二二

「附」 觀 光 案 內



敦賀市廳舍



敦賀工商會議所

一九二八年六月一日



縣社常宮神社



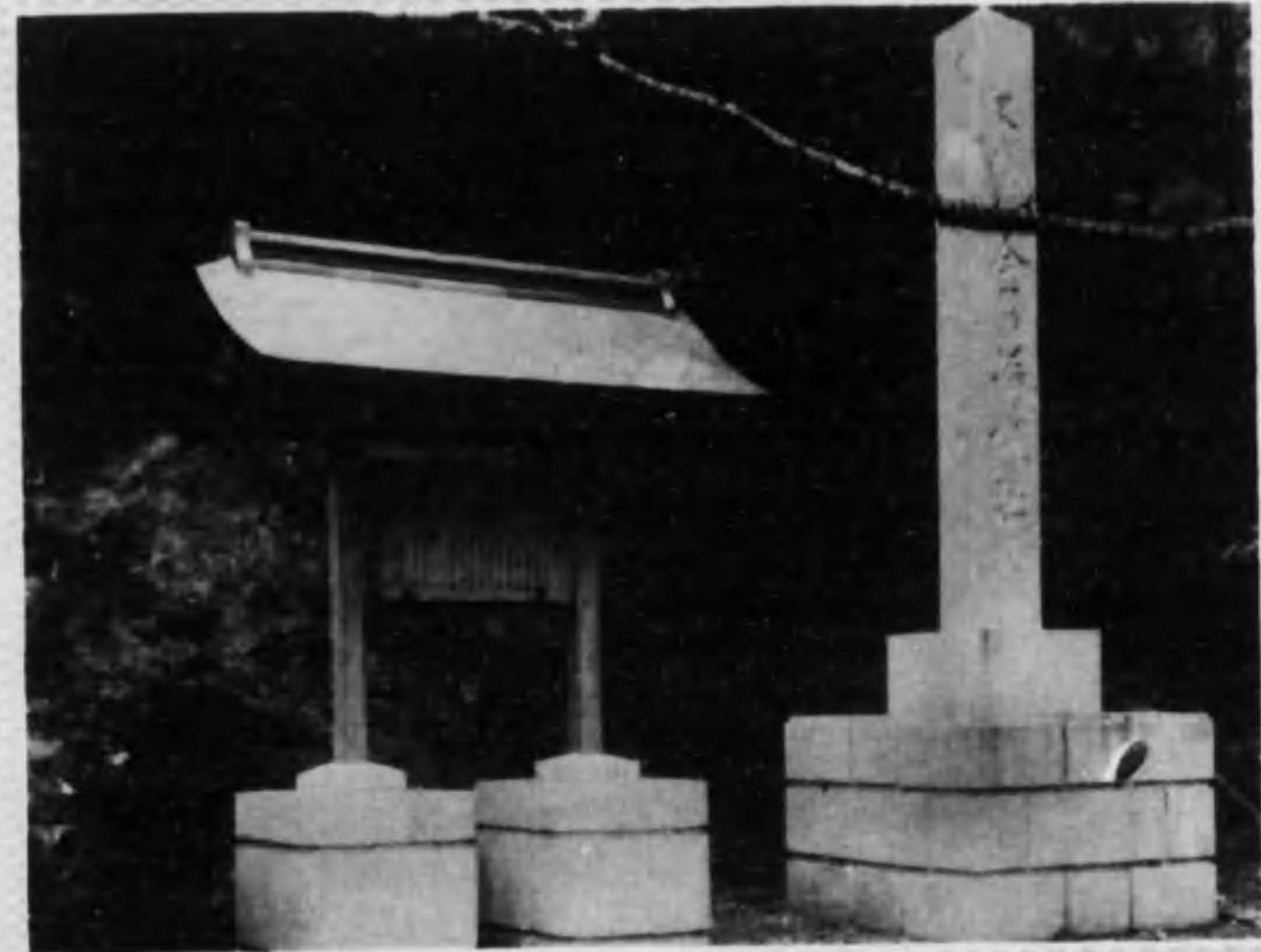
松原公園



縣立教賀商業學校



官幣中社金崎宮



金崎城趾



東洋紡績株式會社敦賀工場



武田耕雲齋等墓



敦賀メセトン株式會社工場



敦賀港棧橋



敦賀驛前通



川崎海水浴場



神樂通

市勢要覽

沿革



敦賀は往昔「角飯浦」と稱へ太古より開けし港津なりしが、崇神天皇の御代朝鮮任那の皇子都奴賀阿羅斯等來朝せし時、此地に上陸し、後永住して司となりしより、地名を「角鹿」と改め、更に和銅年間に敦賀と改字し、奈良朝時代に之を「つるが」と轉訛して今日に及べりと云ふ。降つて仲哀天皇は、神功皇后と共に此地に行幸あり、韓國征討の御準備として皇后暫く止まり給へり。

聖武天皇の朝より渤海國の使節常に来貢せるを以て館を設けて之れが接遇に當れりと傳ふ。南
北朝以來、敦賀は京師より北國に到る咽喉部に位せるの故を以て屢々戰亂の巷となり、新田義貞、
尊良、恒良兩親王を奉じて敦賀に入り、足利氏の軍に包圍せられて尊良親王は御自害あり、義貞の子

新田義顯は殉死す。其後朝倉氏代々の居城あり、織田信長之れを亡ぼし、更に徳川時代の初、結城秀康の所領となりしが、寛永二年京極忠高の領地となり、同十一年京極氏出雲に轉封せらるゝに及び同十二年此の地を酒井忠勝に賜ひ、爾來小濱藩として若狹一圓と共に酒井氏の所領たりしが、明治三年藩制改革に伴ひ隣藩鞠山藩を小濱藩に合併し、同四年七月藩を廢し縣を置き、同年十一月小濱縣を廢して敦賀縣を置かる、同六年一月足羽縣を敦賀縣に合併し、同九年八月敦賀縣を廢して滋賀縣に合す。同十四年二月滋賀縣及石川縣の一部を分合して現今の福井縣を置かるゝに及び、敦賀は福井縣の管轄に入りて今日に及べり。

敦賀市は以前泉・津内・三島・敦賀の四大字より成り、敦賀は更に二十四區に分割したる市街地にして他の三字は農業地域なりしが明治十八年此の二十七ヶ町村を聯合して、一戸長役場を置き、同十二年町村制の實施に際し、之れを一團として敦賀町とし、後町勢の發展に伴ひ行政區劃を三十區に分つ。

昭和九年六月二十一日内務省告示第三百三十三號を以て都市計畫法施行地に指定せられ、更に昭和十一年五月内務省告示第三百三十三號を以て同年六月十八日より本市に市街地建築物法一部施行

地に指定せられたり。

昭和十二年四月一日敦賀町及之と隣接の松原村を廢し敦賀市を設置せらる。

第二 地 勢

福井縣の西南部に位す。地勢概ね平坦なれど西部海岸線に沿ふに従ひ高燥となり、北方海に面し海濱至る處白砂青松風光明媚なり。市の西境に立石半島突出し、東、郡境なる鉢伏、木の芽連山と相對して敦賀灣を擁す。北陸本線の南北に貫通する外敦鶴線は本市を起點として舞鶴、宮津及京阪地方と連繫す。臨港鐵道は敦賀驛より敦賀港驛及敦賀新港驛に達し船車の連絡至便なり。

此の地又史蹟に富み、山紫水明四時の眺望絶佳なるを以て眞に理想の遊覽地たるは勿論、土地肥沃にして排水亦良好且つ氣候溫和なれば五穀豐饒し、加ふるに海岸よりの惠澤多く、生活上好適の地なりとす。

第三土地

面積	官有地	地有目		反租別	賃貸價格	免租地別
		田	地			
四八七 ^方	三、四八八 ^反	田	地	七、四三二 ^反	一九二、九三四 ^円	二、七三三 ^反
		其山宅畑	他林地	三、八八五	四、五九九	
		計		二六、〇二四	一、一〇九	
				三、一八	五、〇七五	
				一六、〇〇六	三、七三五三	
				二六、〇二四	五、七七、五五八	

第四戸口

1、人口及世帯數

世帯數	人口	世帯數	人口	世帯數	人口	世帯數	人口
五七二	二、五四九五	六〇五六	二、七六〇九	六、五〇九	三〇、九一一	六、三三七	三、八、四〇〇
大正十四年國勢調査		昭和五年國勢調査		昭和十年國勢調査		昭和十一年末現在	

2、出生及死亡

年次	出生		死亡	
	本籍人	非本籍人	本籍人	非本籍人
昭和七年	六三〇	一四七	四四三	四四八
昭和八年	五八五	一六三	四九六	五一二
昭和九年	五七七	一五二	四二六	四六九
昭和十年	五八七	一八〇	四〇一	四五一
昭和十一年	五六八	一八七	四五八	四九〇
計				

3、職業別戸口

區分	農業	林業	工業	商業	水産業	官公吏	勞役	其他	計
戸數	五八九	一三	八五〇	一、七四二	二九九	一、二二三	九六五	七一九	六、三三七
人口	二、九九八	四九	六、五三四	八、三九一	一、四六一	五、七二三	四、二二七	二、五七七	三、八、四〇〇

第五教育

1、公立學校

學區 校名	分	學級數	職員數		生徒數		所在地
			男	女	男	女	
縣立敦賀商業學校		10	10	1	45	1	敦賀市松島
縣立敦賀高等女學校		8	10	6	1	39	敦賀市津內

2、公私立學校

學區 校名	分	學級數	教員數		生徒又ハ兒童數	
			男	女	男	女
敦賀高等常小學校		3	16	13	65	59
敦賀南尋常小學校		3	3	2	60	57

校名	分	學級數	男	女	生徒又ハ兒童數
敦賀北尋常小學校		3	8	4	60
松原高等常小學校		8	7	3	31
常宮尋常小學校		3	2	2	3
杵見尋常小學校		3	2	2	7
松原高等常小學校 手分教場		1	1	1	1
色浦底分教場		1	1	1	2
立石分教場		1	1	1	1
白木分教場		1	1	1	8
敦賀青年學校		1	19	1	25
松原青年學校		8	11	2	110
杵見青年學校		2	3	1	25
常宮青年學校		2	3	1	22
私立東洋紡績青年學校		10	10	3	33
私立曹紹學園		4	11	1	30

欠

3、學齡兒童就學狀況

學齡兒童數	就學兒童數	未ダ就學ノ始期ニ達セサル者	尋常小學校ノ教科ヲ卒ヘタル者	不就學兒童數
五〇五五人	三八一人	六五八人	五六六人	一五一人

八

4、小學校兒童進學狀況

卒業又ハ修了兒童數	區分		進學學校別			進學兒童數合計
	高等科	中等學校	青年學校	合	計	
尋常科卒業兒童數	三〇〇人	二五七	一八〇人	一四四	八六人	二八二人
高等科第一學年修了兒童數	一七四	一四七	一	一	八	二三八
高等科卒業兒童數	一八〇	二二〇	一	一	二	二二五
						六〇

敦北樺 海道太 賀道太 線	惠雄 須取基 線	敦大 賀泊 線	新大 湯連 線	北大朝 海道連 鮮線	敦清 賀津 線
北日本汽船		本郷汽船	大連汽船	島谷汽船	朝鮮郵船
福眞愛榮紅溫 州岡德福海洲 丸丸丸丸丸		五帝 劍海 山丸	河河 南北 丸丸	朝日天明 海本海石 丸丸丸	釜慶 山安 丸丸
一、四、五、四	一、二、三、八 七、五、六 一、二、六、六 一、一、八、五	一、二、四、〇 一、六、四、六	四、九、〇、〇 四、九、〇、〇	二、六、八、一 二、六、八、一 三、一、〇、三 三、一、〇、三	一、六、三、六 二、〇、九、一
月 二 回		月 二 回	月 三 回	月 八 回	自四月 至九月 自九月 至十月 月四回
雄基、羅津、清津、城津	大泊、眞岡、惠須取、小樽、船川 新潟、七尾、伏木、敦賀、舞鶴、	大泊、小樽、船川、敦賀	營口、大連、伏木、新潟、其他	大連、仁川、群山、木浦、釜山、 浦項、境、宮津、舞鶴、伏木、船 川、函館、小樽、大泊	雄基、清津、城津、元山、舞鶴、 宮津、境

欠

第十一 運輸		1、旅客調	
九州 賀州 線	藤山汽船	富岡丸 神通丸 第一ときわ丸 泰北丸	九六八 九八五 八九二 一二九六
鶴丸汽船 岡田汽船	黑髮山丸 三福丸 第一信洋丸 北山丸 第二信洋丸 金立山丸	隨	隨
		時	時
		若松、舞鶴、敦賀	真岡、大泊、稚内、小樽、函館、 伏木、敦賀

教 賀 驛	乘車(船)人員		降車(船)人員	
	昭和十年中	昭和十一年中	昭和十年中	昭和十一年中
	三〇、一〇〇人	二九、六〇八人	二九、九八〇人	二九、一六三人

教 賀 港 驛	發送數		到着數	
	昭和十年中	昭和十一年中	昭和十年中	昭和十一年中
	一、六八三 七、三三五	二、五四七 一〇、四五六	六五九 七、〇八四	一、四三三 九、四五九

2、貨物調

教 賀 港 驛	發送數		到着數	
	昭和十年中	昭和十一年中	昭和十年中	昭和十一年中
敦賀驛	二八、一九三	三三、〇一六	一〇、七七〇	五九、八八九
敦賀港驛	一七〇、六四八	一八三、六五四	七、七二一	八二、三三八
敦賀新港驛	一五二、三四四	一四九、二〇九	一五、六七八	二九、三〇九
敦賀港	九一、七三九	一〇一、九二九	三、〇七二	三四、九〇一

3、移、輸出入貨物數

年 度	移、輸		入		計	
	種別	額	種別	額	種別	額
昭和九年	移、輸	六二、五〇六	移、輸	三、五一一	計	三、五一一
	額	六、九二六、三三二	額	一、一三九、九二五	額	二、四、三九一、三〇二
昭和十年	移、輸	三、五一一	移、輸	一、一三九、九二五	計	一、一三九、九二五
	額	三、五一一	額	一、一三九、九二五	額	二、四、三九一、三〇二

附
觀
光
案
內

昭和十一年	九一、七三九	一三、六六一、〇九五	三三五、六七八 一五〇、九三〇 四七〇、三七四 三三七、二二二 一二、六八九 六一三、二八七	一七、四二五、二八六	四二七、四一七 一五〇、九三〇 四七〇、三七四 四三九、一四一 一二、六八九 六一三、二八七	三二〇、八六、三八一 三六、七六、二六六
昭和十年	一九、九二九	一九、七八三、六五五	一六、九七九、〇二二	四二七、四一七 一五〇、九三〇 四七〇、三七四 四三九、一四一 一二、六八九 六一三、二八七	三二〇、八六、三八一 三六、七六、二六六	

第十二 通信

1、電信、電話發受數

受發 信信	昭和十年中	昭和十一年中	昭和十年中	昭和十一年中
	八五、九九三 七五、二八〇	五七、一〇三 七六、二六〇	二五、二四八 二五、六九八	一一三、五八九 一三〇、八四二
	電信	電信	電話	電話

2、郵便、小包發着數

到發 着送	昭和十年中	昭和十一年中	昭和十年中	昭和十一年中
	二八、七〇五 二五、六七四	二八、〇四六 二九、五二七	一六、六九〇 四三、〇九八	一七、九〇七 四三、八〇七
	郵便	郵便	小包	小包

目次

概説	二二
氣比神宮	二三
金崎宮	二五
常宮神社	二五
松原神社	二六
金崎城址	二六
明治天皇行在所	二七
武田耕雲齋等墓	二八
氣比の松原	二九
西福寺書院庭園	二九
「新曲」四季の敦賀	三〇

概説

敦賀は古來海陸交通の要衝として、夙に日本海方面の文化發祥地となりし地にして、古代仲哀天皇神功皇后は、朝鮮御征討の策源地として行在所を設けられ、既に三韓との交通開け、渤海の朝、貢使の來朝あり、更に南北朝時代に入りては、一時戰亂の巷と化したれ共、よく其の盛況を保ち、更に徳川時代に至りては、松前貿易の中心地として殷盛を極めたる地にして幾多の史實に富めり、又敦賀灣を擁して天與の山水の美に恵まれ、景勝に優れたるを以て古蹟を尋ねると共に、風光を賞し來遊するもの多し。

官幣大社氣比神宮

市内曙地籍に鎮座す、境内一萬餘坪、祭神は本殿、伊奢沙別大神（又の御名御食津大神）仲哀天皇神功皇后の三神を祀る。東殿、總社、平殿、西殿の四社宮には日本武尊、應神天皇、玉妃命、武内宿禰命を祀る。

北陸唯一の官幣大社にして、御食津大神の鎮座は神代なりと傳ふ。仲哀天皇、神功皇后と共に御親

拜ありて韓國征服の祈願あり、應神天皇亦行幸ありて大神を拜し給へり、此の由緒を以て御食津大神の祠に配祀せらる。

御食津大神は天日槍なりと言ひ、異國の事に故ある神にして古事記に承和六年遣唐使の船歸着難の時、住吉神社と氣比神宮に幣を奉りて歸り着かむこと祈り給ひしとあり、天日槍は敦賀の地を開きたる神にして、この神を敦賀に祀れるのは、當地は日韓交通の要地なるが爲にして、仲哀天皇の敦賀に行幸ありしは海路の安穩を祈られしなり、明治二十八年官幣大社に列せられ、神宮の稱を宣下せらる。本殿は慶長十九年の再建、西門の華表は高さ三丈六尺、柱間二丈三尺、正保二年の建立にして柱材は土佐國より調進せし檜の大木一本を以て造られ兩者共に國寶たり、社地平坦、古松老杉鬱蒼として、そゞろに神威の高きを偲はしむ。

境内多數の攝社末社があり、榮梅は菅原道真公の勅使として奉幣ありしとき手植せられたるもの、藁なりと、又旗揚松は氣比大宮司一族の南朝に味方し、居城金崎城に立籠りしとき此の松に旗を揚げたりと傳へらる。

有名なる桃太郎の彫刻は本殿の桁梁に刻まれ、桃の實の中なる陣羽織の扮装は童話の起源を物語り、特に桃山時代の作品として其名夙に顯はる。

官幣中社金崎宮

市内舊金崎城趾に鎮座す、神域二萬七千四百餘坪、延元の昔、金崎城に籠られたる尊良、恒良兩親王の御靈を祀る。攝社絹掛神社には延元の役に殉難せし藤原行房、新田義顯、氣比氏治以下殉難將士等を祀る。

明治二十三年金崎宮と宣下せられ、官幣中社に列せらる。

宮域は敦賀灣に臨める天筒山上にありて、矚目開豁市の全貌を眼下に收め、殊に灣内の眺望絶佳なり、境内櫻樹楓樹多く、春期は滿山花と化し、夏期境内鷗ヶ崎には海水浴の設備あり、四季各々その趣を異にし遊覽客にて賑へり。

金崎古戦場の趾とて舊蹟多し。

縣社常宮神社

官幣大社氣比神宮の境外攝社なり、敦賀市常宮に鎮座せらる。境内四千四百五十坪。天八百萬比咩、仲哀天皇、神功皇后を祀る。社の創建詳ならず。

常宮とは神功皇后の御神託に「常に宮居し波靜かなる哉樂しや」とあるに因ると言ふ。明治九年縣社に列せらる。社地宏濶にして風光清洒拜殿は直に海に臨み浪靜かに老松枝を垂れ風清く、境内には

飛瀑あり、山上鸚鵡石、海岸龍燈の松あり一勝區をなせり。

社に納むる銅鐘は新羅の古鐘にして豊臣秀吉征韓の時獲たるものを、慶長二年此の宮に獻ぜりと云ふ。銘文に「太和七年三月日菁州蓬地寺鐘成云々」菁州は新羅の地名千二百八十年前の所造なり。明治三十三年國寶として指定さる。

松原神社

市内松島にあり、境内二千三十三坪。

舊水戸藩士、武田伊賀守等四百十一名の靈を祀る。慶應元年伊賀守等を斬するや土墳を掘り屍を埋めしも後神社を創建せんことを願ひ、明治八年松原神社の御神號を賜はる。明治十一年十月明治天皇北陸御巡幸の節、憂國の志士空しく刑場の露と消えしを愍ませ給ひ、祭祀料金五百圓を下し賜はれり。明治三十一年神殿を建築され、その墓と共に永へに地下に眠る英靈を祀る。

史蹟、金崎城址

市内泉地籍に在り、地域二萬一千五百坪。延元の役の古戰場にして延元元年後醍醐天皇、足利尊氏の降を納れ京都に還御し給ふや、別に新田義貞に命じ北陸道を鎮撫せしめらる。義貞即ち皇太子恒良親王、皇子尊良親王を奉じて金崎城に據る、敦賀を擁して北陸、山陰の海路を扼塞し、足利方の糧

道を絶ち日本海を制せん爲なり、この時賊將足利高經、高師泰の軍海陸より金崎城を攻撃す。城兵天險に據り死力を盡して善戦せしも、糧食缺乏し馬を屠りて支えしも力盡きて城遂に陥り、尊良親王は自害し給ひ、新田義貞、氣比氏治以下在城の將士百餘人親王に殉ぜし地なり。

城址は敦賀灣頭天筒山上にありて一ノ木戸、二ノ木戸、三ノ木戸、焼米趾、月見御殿趾等地形略々舊規を存し當時の戦況を物語れり。昭和八年史蹟として指定され、敦賀市之れが管理に當る。城址の主要部に官幣中社金崎宮ありて親王、忠臣を永く護國の神として祀る。

地域は風光絶佳、敦賀灣を一望のうちにおさめ、古史を尋ね風光を賞して來遊するもの多し。

史蹟、明治天皇敦賀行在所

市内蓬萊に在り、地積百四十坪餘。明治十一年明治天皇北陸御巡幸ありし時、行在所となりし所にして、八月三十日東京御發轅、九月九日敦賀に行幸、氣比神宮、松原公園等に玉歩を運ばせられ、同夜御一泊あらせられし所なり、當時三井銀行支店たりしも後閉鎖さるゝに及び株式會社敦賀銀行（後の敦賀二十五銀行）之を繼承し、更に大和田銀行に合併され、現在大和田銀行之を管理す。舊地域内に於てその位置を變更せしも尙よく舊規を保ち、明治天皇の聖蹟として永くその御仁徳を偲びつゝあり。

史蹟、武田耕雲齋等墳墓

市内松島にあり、二百五十六坪の地なり。徳川時代の末期、外夷の漸く跋扈せんとするの時水戸に於ては、勤王の志篤き武田伊賀守等尊王攘夷を唱導し、幕府とその主張を異にす。かくて元治元年水戸町奉行田丸稻之衛門、藤田小四郎等その與黨を率ゐ筑波山に據る、志士集るもの四百餘人、武田伊賀守も同勢に加はり幕兵と對峙せしも、一黨は西上して一橋中納言慶喜公に投じ衷情を朝廷に訴へ攘夷の素志を達せんと圖る、かくて武田伊賀守を總大將として下野、上野を経て信濃に入り、十二月四日越前國大野領に入り具さに辛苦を嘗め、十一日遂に敦賀郡新保に入る、幕府は沿道の諸藩をして邀撃せしめしも一方在京の一橋中納言も亦朝廷の聽許を得て追討の爲發せらる。こゝに於て一黨は此の君に投じて微衷を天朝に達せんことは豫て望む所なりとし、一橋中納言に呈する書を捧げて加賀の軍門に降る、幕府は之を糺彈し、翌二月四日來迎寺野に於て伊賀守以下三百五十三人を斬首せり。憂國の大志を懷き乍ら志、時と違ひ空しく刑死せる苦衷を憐愍し後人相寄りて墓を築く、武田耕雲齋等の墓之なり、墓は來迎寺野、緑松の間にありて塚根十二間四方、土壇の高さ一丈五尺、武田耕雲齋以下の英靈を祀る。昭和九年史蹟として指定され敦賀市之を管理す、その憂國の志を賞し參詣する者跡を絶たす。

名勝、氣比の松原

市内松島に續く海岸に面する一帯の地なり、官有風致林にして縣營公園とつて貸下げらる。廣袤實に二十有餘萬坪、凡て緑松を以て覆はれ、松は緑に砂は白く、地は海に濱し松翠蒼鬱として千古の色を水に映し清韻眞に掬すべく閑雅實に賞すべきの地なり。明治十一年明治天皇北陸御巡幸の節、風光を賞し給へり。地域は市の西境に近く四時遊覽客にて賑へるも、殊に夏期は海水浴、キヤムプ等に適し緑間に清遊するもの頗る多し。

名勝、西福寺書院庭園

敦賀驛より西約三千米、自動車の便あり。地積千四百三十餘坪。淨土宗鎮西派中本山、西福寺の庭園にして築造の年代詳かならざるも、徳川中期なるが如し、山庭にして中央山腹の窪には花崗岩簇出し、松樹、雜木に交りて處々躑躅等の刈込物及椎、楊、梅等を植う。山麓に池あり、池中に三嶋を置き橋を架く、池畔より山麓に涉りて石を配し北邊に小瀧を懸く峻嶺の壯觀、泉石の雅趣を有し山庭として特種の風格を有す、昭和七年四月名勝として指定され、西福寺之を管理す。

著名なる庭園として尋ねるもの尠からず。

其他辨天岩、鷺ヶ崎、色ヶ濱、水島、猪ヶ池、立石岬、門ヶ崎、松ヶ崎等風光の賞すべきもの到處に存して雅俗共に杖を曳くもの尠からず。

新曲、四季の敦賀

土岐善麿 作詞
町田嘉章 作曲

へそれ、敦賀の港は海ふかく、岸壁堂々新たに築いて、ひろき誇りを滿蒙や、出船入船東洋に、ここ北陸の繁昌は、げにも名におふ國際都市、いざや名所をめぐらん。

へ春霞、たつやさなみ潮風に、ひかり照りそふ花ざくら、老樹わか樹のかすくの、色も芳野のひとすちに、かはらぬ昔南朝の忠臣義士のまごころを、仰げば高し金ヶ崎。そのみ社に願かけて、そごころのゆきすりや、花換祭おぼる夜の、燈かげ彩なす思ひをば、たれにあかさん胸のうち、かはす翼は鷗ヶ崎よ、枝はつらぬる絹かけ松の、みどりに映る白帆さへ、かぞへも盡さぬ海の幸。

(一)へね、ね、この松原、夏は松原、
袂すゞしや露しづく、
露は身にしむ、風も身にしむ、
君のなさけが、ね。

(二)へね、ね、この松原、夏は松原、
濱は遠淺、寢あびて、
潮はきら／＼、肌はつや／＼、
鶯とからすか、ね。

(三)へね、ね、この松原、夏は松原、
キヤンプ樂しや浪まくら、
浪はさ／＼やく、君もさ／＼やく、
戀は岩かけ、ね。

(四)へね、ね、この松原、夏は松原、
小舟うれしや櫓のひゞき、
さへかる／＼、ゆくは水島、
月も出潮に、ね。

へ織りなすは、にしきの旗かもみち葉の、あやにかしこき氣比の宮、その大鳥居秋空に、朱の香高く神寂びて、神殿神寶さま／＼に、瑞垣ひろく街並も、きはひにぎはふ秋祭、一の幣立て二の幣立て、神輿花山車武者すがた、飾る錦欄眼もあやに、練りゆく道も開けゆく、御代のめぐみの八衢や、げに波風もしづかにと、祈ることろは常の宮、渚松風拜殿の、おぼしま近くさす月は、清き眞砂の岩田帯、結ぶちざりは龍燈の、影も消えせじ鐘のひゞきに。

へあれ、あれ、嵐よ、みぞれ雪よ、冬は早くも北國の、木の芽峠は名のみにて、野坂もわかぬ山つづき、天筒はかしこ小銃をそろへて、大旗小旗ひたおしに、み國のためと道とほく、こゝろ武田の同勢が、涙まぎらす戯踊り。

375
421

三三二
「こんど上りの天狗さん、尊王攘夷をもととして、關八州を通りぬけ、官軍討手と聞くからに、長い大小投げいだし、無腰でぶらく加賀さんまわりましょ。
「さる程に、さる程に、世もあきらけく治まれば、み靈鎮まる松蔭に、常磐堅磐の風も和みて。
「げに千年や萬年と、龜につるがの時をえて、一天四海末廣に、祝ひ壽ぐけふのめでたき。

昭和十二年六月廿一日印刷
昭和十二年六月廿五日發行

福井縣敦賀市役所内
編輯者 水野定治
福井縣敦賀市松菜一四七
印刷者 宮川孫七
福井縣敦賀市松菜一四七
印刷所 宮川印刷所
發行所 福井縣敦賀市役所

終

